

# 防衛大学校本科第46期、理工学研究科前期課程第39期及び総合安全保障研究科第4期学生卒業式防衛大学校長式辞

(平成14年3月24日)

防衛大学校本科第46期、理工学研究科前期課程第39期及び総合安全保障研究科第4期の学生諸君は、本日をもって所定の課程を修了し、4年及び2年にわたる情熱を傾けた小原台生活に別れを告げることになりました。卒業生諸君に対し、私は本校の教職員、指導教官一同とともに、心から祝意を表します。



第7代学校長 西原 正

本日のこの栄えある式典を、新築されたばかりのこの講堂で挙げるに当たり、国務ご多忙の折りにもかかわらずご臨席賜りました小泉内閣総理大臣<sup>注(1)</sup>、綿貫衆議院議長<sup>注(2)</sup>、中谷防衛庁長官<sup>注(3)</sup>をはじめ、国会議員ほか曾野綾子先生、木村大学評価・学位授与機構長<sup>注(4)</sup>、内外多数の来賓各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。とくに地元横須賀ご出身の小泉総理並びに防大同窓生でいられる中谷長官のご臨席を得ましたことは、式典をひととき意義深くさせるもので、喜びに堪えません。

また、本日の卒業生がここに至るまでの間、防衛庁自衛隊の関係者各位、官民の諸機関並びに在日米軍、各国大使館等から寄せられたご指導、ご協力に対しましても、併せて厚くお礼申し上げます。

更にはまた、遠路はるばる本式典にご参列賜りましたご両親、ご家族の皆様方におかれましては、今日までのご協力に深く感謝申し上げますとともに、ご子女のご卒業を心からお祝い申し上げます。またこの式典には、防大同窓生のうち、とくに第3期生の方々をお招きしておりますが、これらの200名を超える白髪まじりの大先輩が、43期後輩の諸君の門出を祝福して下さっています。

さて本日、卒業する367名の本科学学生諸君、諸君は平成10年4月、大きな希望とそして一抹の不安をもって、ここ小原台にやってきたこと

---

注(1) 小泉純一郎

注(2) 綿貫民輔

注(3) 中谷 元

注(4) 木村 猛

でしょう。それからの4年間に、諸君は慣れない集団生活、厳しい学業、激しい訓練などを通して、精神的にも肉体的にも大きく成長しました。こうした4年間の修練は、一般大学では得られない貴重な体験です。いまや、諸君は、試練に耐える強靱な精神と肉体に自信と誇りをもって、幹部候補生学校に進んでもらいたいと思います。

その際、まず諸君には、これからいよいよ国防の専門職の道を歩むのだという強い自覚をもって、自らを一層鍛えることを期待します。それは、難事にあつて「職場を棄てない」、「責任を回避しない」、また時と場合によっては、自らの命を顧みずに任務を果たすということにつながるかもしれません。それは国防の重要さに対する自らの信念と、自らをそれに賭けるのだという覚悟を意味します。

また諸君には、体力増進とともに、不断の勉学の習慣を保持して欲しいと思います。本校で学んだ知識を基礎に、余暇を惜しんで自分の視野を広めることが重要です。それは柔軟な発想、思考力の進展につながります。古典文学、哲学書、宗教書、歴史書などの幅広い書物に親しむことによって、重要な局面にあつての大局的判断や決断の重要性を学び、また人間の喜怒哀楽に関する感性を磨いて、リーダーにとって必要な人間的深みをもてるよう努力して欲しいと思います。

近年自衛隊の任務が地理的にも機能的にも拡大している現状に鑑み、幹部自衛官が、国防を単に一国家の見地だけでなく、地域的、国際的な観点から検討することがますます必要になっています。その意味でも、幹部自衛官は、日頃から国際情勢の動向に強い関心を持つことが肝要となってきます。

更には諸君には、武器をもつことを許された集団としての強い責任感と高い倫理感が必要です。武器の使用は、法的責任ばかりでなく、道義的責任も伴います。また、シビリアン・コントロールの重要性を理解し、国民から信頼される幹部になることを強く望みます。

次に、本日卒業する65名の理工学研究科前期課程及び17名の総合安全保障研究科の学生諸君に一言述べます。諸君のうち、自衛官は、過去2年間部隊を離れ、学問の道に身を置き、研究に集中できる環境にいました。この2年間の研究生活を通して、より専門性を深めることが出来たと思います。その成果を更に発展させ、日本の防衛技術の高度化や新しい防衛戦略の構築に寄与してくれることを望みます。

卒業する研究科学生には、自衛官以外の防衛庁事務官・技官及び海上保安大学校からの5名が含まれていますが、過去2年間の本校での生活

を通して、本校による幹部自衛官育成への理解を深めてくれたことと思います。今後、国防の重要性の認識を他の社会人と共有してくれることを期待します。

本日卒業する学生には、インドネシア共和国、大韓民国、シンガポール共和国、タイ王国及びヴェトナム社会主義共和国出身の7名の本科留学生、11名の研究科留学生諸君がおります。留学生は、祖国を離れて、日本語を学び、日本人学生とともに文字通り寝食をともにし、所定の課程を見事に修めました。この努力に対して深く敬意を表します。

留学生には、異文化体験を生かして、祖国の防衛のみならず日本との架け橋になってくれることを期待します。そしていつの日か、本校の卒業生同士が、国際舞台で、平和と安全のために活躍してくれることを願ってやみません。

防衛大学校は、今年創立50周年を迎えますが、この間約2万人の卒業生を送り出しました。そして彼らが、日本の防衛において中核的役割を果たしてきたことに対して、我々はそれを誇りとするものです。しかしまた同時に我々は、過去を謙虚に反省し、身を引き締めて日本の防衛に当たる必要があると考えます。

学生諸君、いよいよ小原台を後にする時がきました。例年より早く開いた桜の花と、同窓会が諸君の卒業に間に合わせて寄贈してくれたこの講堂のステンドグラスが、諸君の卒業を祝ってくれています。これから幹部自衛官として歩む道のりには、予期せぬ困難が待ち受けているかも知れません。また日本が思わぬ危機に直面するかも知れません。そうした時には、この「若人の城」小原台で培った精神によって、困難や危機を乗り越えてくれることを、そして学生歌にあるように「朝に勇智を磨き、夕に平和を祈る」ことを心に秘めて、崇高な国防の任務に当たってくれることを望みます。我々教職員一同は、前途洋々たる諸君の門出を祝い、健闘を祈っています。

諸君、卒業おめでとう。